

# 北海道師範塾 塾頭通信

## 「教師の道」

第518号 平成25年3月28日

### 教える事の難しさ(1)

札幌交響楽団のコンサートマスターをされている大平まゆみさんが、「教えることの難しさ」と題するエッセーを書いています(平成24年4月14日付読売新聞)。

大平さんは、音楽ファンなら誰でも知っているバイオリニストです。



彼女は、東京芸術大学をご卒業後アメリカに渡り、スタンフォード大学等で講師を務めています。

1989年に帰国し、活動拠点を日本に移されています。1998年からは札幌交響楽団のコンサートマスターを務めていますが、その傍ら、病院や福祉施設での訪問演奏など、音楽の裾野を広げる活動にも非常に熱心に取り組んでいます。

彼女の活動の様子は、キタラの舞台上で拝見した事がありますが、とても素敵です。

クラシックというどうしても敷居が高いという印象ですが、大平さんは決して偉ぶったそぶりを見せませんし、語り口にはいつも親しみを感じており、「皆さんに音楽の楽しさを知って欲しい」という姿勢は、好感が持てます。

大平さんには、沢山の教え子もいらして、その中にはコンクールで優勝した子や、コンサートマスターとして活躍している方もいるそうですが、それでも彼女は、エッセーの中で「教えることの難しさ」について語っています。

楽譜を読めない私としては、楽器が弾けるというだけで憧れますが、特にバイオリンをまるで自分の体の一部のように弾きこなす人を見ると、尊敬してしまいます。

コンサートなどでバイオリンを演奏している方達を見ると、皆同じように弾いているように見えます。しかし、大平さんにいわせると「バイオリン演奏の最大の難関はその構え方にある」のだそうで、「私自身、この1、2か月前にやっと納得のいく持ち方を発見したばかり。その上、今の私には毎日と言っていいほど新しい発見があり、その度に弾き方を変えている。」と語っていますが、逆に、教え子には「自信を持って『こう弾くように』となかなか言えない」と率直に語っています。

確かに、人によって指や腕の長さ、体つきが違いますから、「個々に最適のスタイルを見つけるのは簡単なことではない。」というのはその通りであり、そこに教える事の難しさが潜んでいます。

沢山の成功体験を持っている人は、得てして自分のスタイルを相手に押し付けてしまいがちですが、「自信を持って『こう弾くように』となかなか言えない」という大平さんの謙虚な姿勢に学ぶべきだと思います。

それにしても、「最近になってやっと納得のいく持ち方」を発見したという大平さんの言葉には芸の深さを垣間見る思いがすると同時に、完成度の高い大平さんにしてそうなのかと驚くばかりです。

最近彼女は、バイオリンを教える時「音色、曲の流れ、身体の使い方を感じ取ってもらえるように、一緒に演奏する事が多くなった。」とといいます。それは、彼女が教えようとしているのは、単にバイオリン演奏の技術ではなくて「バイオリンを演奏する事の素晴らしさ」だからに違いありません。

幾ら演奏技術が優れていても、演奏している人がバイオリンを演奏することの楽しさや素晴らしさを体現できなければ、聞いている人に感動は伝わらないという事でしょう。

大平さんは、生徒と一緒に演奏する中で、教えている筈の生徒から教えられる事が良くあるそうです。この教え子からさえも学ぶという姿勢は、一流と言われながらもなお成長し続けたいという、彼女の意思表示でもあります。

それは、彼女の、「私自身が自分にとって最高の師であり続けなければならない、そのことだけは確かだ。」という言葉にも、良く現れています。(塾頭：吉田 洋一)